

音楽科における歌唱指導に関する歴史的研究

—— 三浦環の師、サルコリの養女丸山徳子・鶴田昭則のレッスンを手掛かりに ——

藤田文子*

(2020年10月21日受理)

Historical Study of Singing Teaching in Music Department: Using the Lessons of Tokuko Maruyama and Akinori Tsuruta, Adopted Daughter of Sarcoli, Teacher of Tamaki Miura

Ayako FUJITA

キーワード: 音楽科, 歌唱教育, サルコリ, 三浦環, 丸山徳子

筆者は、現在までの音楽科における歌唱指導の先行研究を踏まえ、声帯の健康なども射程に入れ、生活に音楽を取り入れ、生涯にわたって音楽を愛好し、充実した人生を送ることができる方法について模索してきた。

筆者はこういった流れの中で、茨城大学の非常勤講師であり、豊かな現場体験を持つ鶴田昭則の歌唱や歌唱指導法に触れる機会を持ち、声帯の発声障害や、学童嗄声の問題、オーケストラの指揮・指導を含む歌唱指導などといった事柄に、オールマイティに対応できる可能性を見出してきた。

筆者は、なぜ鶴田がこういった問題に対応可能な能力を身につけることができたのかを、鶴田の歌唱に対する学習歴に目を向けることで多くの示唆を得てきた。そこには、サルコリや、三浦環、丸山徳子などといった歴史的には遠くに思える存在でありながらも、現在に普遍的に大きな影響を与える存在があることに行きついた。歴史的な存在でありながらも、「現在に生きる」こういった歌唱指導の教育者の影響を、丸山徳子・鶴田昭則のレッスンを手掛かりに検討した。その結果、①音楽科の歌唱指導、ひいては普遍的に応用可能で教育的な観点、②「歴史認識と歴史研究」という二つの観点を指摘することができ、今後の課題を含め、多くの学びを得た。

はじめに

筆者は、現在までの音楽科における歌唱指導の先行研究^{1) 2) 3) 4) 5)}を踏まえ、発声障害等が原因で教職を離れる教員⁶⁾、学童嗄声の存在⁷⁾などにも目を向け、音楽科の歌唱における声帯の健康も射程に入れ、生活に音楽を取り入れ、生涯にわたって音楽を愛好し、充実した人生を送ることが

*茨城大学教育学部音楽教育教室

できる方法について模索してきた^{8) 9)}。

筆者はこういった流れの中で、茨城大学の非常勤講師であり、豊かな現場体験を持つ鶴田昭則¹⁰⁾の歌唱や歌唱指導法に触れる機会を持ち、声帯の発声障害や、学童嘔声の問題、歌唱指導、合唱を含む第九などオーケストラの指揮・指導といった事柄に、オールマイティに対応できる可能性を見出してきた。

筆者は、なぜ鶴田がこういった問題に対応可能な能力を身につけることができたのかを、鶴田の歌唱に関する学習歴に目を向けることで多くの示唆を得てきた。そこには、サルコリ¹¹⁾や、三浦環¹²⁾、丸山徳子¹³⁾などといった歴史的には遠くに思える存在でありながらも、現在に普遍的に大きな影響を与える存在があることに行きついた。

一方筆者は、音楽教育史学会のシンポジウム¹⁴⁾や、音楽教育学会の学会誌で、今しか残せない、教育的にも、歴史的にも重要な事実・資料を吟味し、検討し、保存していくことの大切さを主張してきた¹⁵⁾。

歴史的な存在でありながらも、「現在に生きる」こういった歌唱指導の教育者の影響を、丸山徳子・鶴田昭則のレッスンを手掛かりに検討することは、それに該当することにもなる。

本論文では、さらにそれらの指導が、現在までの鶴田の音楽科の歌唱指導について、どういった形で影響を与えてきたのか、また、これからの音楽科の歌唱指導にどういった影響を与えうるのかについて検討することとする。

従って本論では、1.サルコリと三浦環、サルコリの養女の丸山徳子、弟子である鶴田昭則との関係について、2.丸山徳子の鶴田昭則に対するレッスンについて、3.鶴田昭則における、音楽科の歌唱指導に与えた、サルコリ、三浦環、丸山徳子の影響について検討することとする。

なお、本論文は、こういった経緯の中で、当初、生の声を残すという立場から、関係者である、丸山徳子先生の娘さんである丸山洋子先生、鶴田昭則先生への、対面でのインタビューを中心に展開するというところで企図されてきたが、折からのコロナ感染拡大予防のために、主にメール等でのやり取りによらざるを得なかったことを付け加えておきたい。

そういった意味で、藤田から鶴田への質問と回答という形で論文が展開することをお許しいたきたい。また資料等の入手に関しても制限が多くあったために、現在検討可能な内容に留めたことをご理解いただきたい。また、鶴田の回答に関しては、カンマ等も含めて、鶴田の表記に極力従ったことも付記しておきたい。

1.サルコリと三浦環、サルコリの養女の丸山徳子、弟子である鶴田昭則との関係について

藤田 サルコリ先生と三浦環先生、丸山徳子先生の関係については、いつ頃レッスンでお聞きになられたのでしょうか？

鶴田 私は、高校2年の時から丸山先生に声楽のレッスンを受けていますが、レッスン中お二人の先生(サルコリー・環先生[サルコリー先生はサルコリ先生、同様に環先生は、三浦環先生を示す(以上、筆者付記。以下、同様。)])について話すことがあり、その名前はよくお聞きしておりました。丸山先生は、よく「サルコリー先生は歌曲であってもアリアであっても、このように歌っていた」

と言ってその歌い方を聴かせてくれました。真似て歌うことの大切さもよく話しておりました。又、環先生のことについてもその名前をよく出されておりました。時には「このような歌い方をしていた」などと具体的に・・・ただ私自身はその頃声楽について無知でしたので、お二人の先生の名前を聞いても、それ以上細かな事を質問することもあまりなかったというのが本当のことです。

これから下記に述べていることは、レッスンの後ですが、丸山先生の長女である洋子さん(丸山洋子さん[筆者付記。]からお聞きしたことについてです。サルコリー先生については、かなり大変重要な事実が伝えられています。

サルコリー先生は、1867年イタリアのシエナで生まれていますが、イタリアではプッチーニとのつながりもあり、かなり有名なテノール歌手で、マンドリン・ギター奏者でもありました。

1911年中国(上海)に音楽学校をつくるため渡ってきたわけですが、中国では、その当時「辛亥革命」があり、立ち寄れず仕方なく横浜に降りたようです。いつしか東京に住むようになり、三浦環先生との出会いがあつたとのこと。そこでは、お二人のコンサ-



左から スズキ:丸山徳子,蝶々さん:三浦環,ピンカートン:永田絃治郎
(昭和11年,歌舞伎座の「蝶々夫人」の舞台写真:丸山洋子氏提供)

トがあつたばかりでなく、環先生は「蝶々夫人」を中心にサルコリー先生のアドバイスを受けるようになったようです。環先生は、30歳の時ご主人とともに海外に渡ったのですが、これもサルコリー先生の後押しがあつたと考えられます。先生は、環先生の外、喜波貞子・関谷敏子・原信子・奥田良三など多くの歌手を育てています。

洋子さんの言葉は続きます。「東京に住む私の母親は、サルコリー先生の養女になったわけですが、多分、それは母親が女学校時代であつたと思います。母親は叔母がサルコリー先生の家のお手伝いさんでもあつたので、小さい時から遊びに行っていたのは確かです。音楽のレッスンも12歳ごろから25歳くらいまで受けていた」とのことです。

1936年サルコリー先生が亡くなられたのですが、昭和10年には、「蝶々夫人」2000回の海外公演を終えた環先生も帰国しており、弟子の皆さんでお送りしたとのこと。昭和11年、歌舞伎座において蝶々さん:三浦環,スズキ:丸山徳子,ピンカートン:永田絃次郎 他の布陣で行った「蝶々夫人」公演を6歳の洋子さんが鑑賞していて、よく覚えていと話されています。

サルコリー先生の墓地は、東京にあり丸山家、特に、今も洋子さんが見守っているとのこと。

2.丸山徳子の鶴田昭則に対するレッスンについて

藤田 鶴田先生は、いつからどのような形で丸山徳子先生のレッスンをお受けになったのでしょうか？

鶴田 私が今から60年前のことです。高校2年の時、音楽部の友人が、「自分の習っているピアノの先生は間違いなく歌い手と思う。声を聴いてもらったらどうか」と言うので、声変わりも終わり高音は自然に出て、特に、イタリアの歌はレコードで覚え絶えず歌っていましたので彼について行きました。丸山先生宅です。：現 小美玉市栗又四ヶ(当時の玉里村)そこは、栗畑の続く中にあり、他に家はあまりなかったように思えます。イタリア民謡何曲か歌いましたら「歌を歌い続けなさい」と言われました。そこから、レッスンは続き、学生時代、教職の仕事をしながらも55歳ぐらいまでレッスンを受けました。当然、他の男の先生や声楽以外の多くの先生からご指導を受けましたが、



サルコリー

(「カヴァレリア・ルスティカーナ」の舞台写真：丸山洋子氏提供)

今、コンサートを続けながら考えることに、先生からのレッスンがあったからこそと思うのは間違いありません。

先生のレッスンの一場面を述べてみます。

発声の練習は、スケールを中心です。自然に音域を広くしていきます。母音のみでなく、合わせて子音の練習です。それも出しやすいひびきで繰り返します。曲そのものの稽古に入ると、フレーズそのものを早く掴むよう求められます。イタリアの言葉は、「日本語の意味もよく読んでくるように」と言われました。「ビブラート過ぎない美しい声を求めなさい」

「小さなひびきを大切に」ともよく言われました。これも大変重要な事と思いますが、よく「テノール：タリアヴィーニ¹⁶⁾の声を聴き真似なさい」とも話されていました。このごろ何故そのように言っていたのか、その理由も解るようになりました。それは、ベルカントそのものの声・ひびきを大切にすることと思えます。

もう一点、よくカルーソー¹⁷⁾がしっかりした身体づくりをして舞台に臨んでいたことも話されていました。

これは私自身の海外での経験ですが、特に、イタリアでは何人かの先生に歌のレッスンを何回か受けたことがあります。私の受けたレッスンが、運よく丸山先生と同じ指導法であったことがいつまでも心に残っています。

3. 鶴田昭則における、音楽科の歌唱指導に与えた、サルコリー、三浦環、丸山徳子の影響について

藤田 鶴田先生においては、音楽科における歌唱指導に与えた、サルコリー先生、三浦環先生、丸山徳子先生の影響について何かありますでしょうか？

鶴田 3人の先生方の指導には、その後、私自身が行ってきた歌唱指導に大きく影響を与えてくれたのは、間違いありません。サルコリー先生の舞台姿(写真で拝見する)。同じく三浦環先生の舞台姿。どちらも素晴らしく、「生」で観たかったと言うのが本音です。歌とは何か・歌をどのように歌

つたらよいか等その指導について受け継いで行くゆるぎないものを想像することが出来ます。

丸山先生の歌唱指導は、音楽科と言う存在をいつも明確にしたものであり、人を育てると言う基本理念が底に流れています。私自身、「叱られる」と言うより「誉められながらレッスンを受けてきた」と自負している一人です。

いつも、述べていますが人間の声には、男女差・大人と子どもと言うような差がありますが、歌い方を変える必要はないと言うことです。同じ方向性で・きれいなひびきが求められているのは、間違いないと考えております。

結びにかえて

筆者は、本論で行った、1.サルコリと三浦環、サルコリの養女の丸山徳子、弟子である鶴田昭則との関係について、2.丸山徳子の鶴田昭則に対するレッスンについて、3.鶴田昭則における、音楽科の歌唱指導に与えた、サルコリ、三浦環、丸山徳子の影響についての鶴田の著述を通して、二つの流れを読みとることができると考えている。

まず最初は、音楽科における、歌唱指導の観点である。

それは、歌唱指導の基盤となる発声の技術的なことの指導などを入口として、最終的には教育の観点が示されていることである。

声帯の健康は言わずもがなのこととして、教師と生徒の信頼関係、生涯にわたって、音楽を愛好する姿勢の育成、豊かな情操など、生涯を通して揺るがない情緒を、児童・生徒の心の中に植え付けること。児童・生徒の中に、普遍的に使用可能なフィルターをつくり、自分で取捨選択のできる心を作り上げたことでもあります。

こういったことは、今日でも音楽教育上の観点として、十分に通用することでありましょう。

また、レッスンは、茨城県のかかり奥の場所で行われたにもかかわらず、サルコリや、三浦環、タリアヴィーニ、カルーソなど、国際的な色合いを帯びていたことも、幸いしたといわざるを得ません。

また、こういった自然豊かな場所だからこそ、教育の観点が守れたのかもしれませんが。

三浦環は言っています。『お蝶夫人』をうたうプリマドンナも無暗矢鱈にうたうとホルビのように喉をつぶしてしまいます。ホルビを引っ張り出すまでもなく、現に世界一といわれたガリクルチもトティ・ダルモンテも、いたずらに他人の真似をしてうたったからとうとう高い声が出なくなりました。『お蝶夫人』は役の性質上、泣いたり、笑ったりしてうたわねばなりませんから、コロラチウラ・ソプラノには荷が重すぎて最後の幕になるとうたえなくなってしまうのです。自慢をするようですが、『お蝶夫人』を二千回もうたって喉をつぶさないのは世界中で私一人だけです。それというのも私はほかのプリマドンナの真似をせず、私が自分で工夫した蝶々さんを自分の喉を無理をせず、自分が工夫した発声法によって楽々とうたったからです¹⁸⁾。」と。

つまり、どのような状況にあっても、無理をせず、自分の能力の中で、創意工夫する。

声楽であっても、他の場面であっても、普遍的に応用可能な教育的観点ではないでしょうか。

次に、二番目の観点ですが、筆者が本論文注14)で示した、「歴史認識と歴史研究¹⁹⁾」の観点であ

ります。

もともとは、筆者が参加した、音楽教育史学会の筆者のシンポジストとしての提言でありましたが、「歴史研究の基本として、唯一研究の基盤となるのは、その「実証的な証拠」であります。従って、現在のみに収集可能である、貴重な歴史的存在を発見し、後世まで大切に残すことが必要不可欠なものとなりましょう。人的なものを含む、これらを用いて本来実証的な歴史研究に生かしていくことが重要であると考えます²⁰⁾。」としました。

前回は今回も、ご披露いただいたのは、丸山徳子先生の長女の丸山洋子先生がご所なさっていた、一葉のお写真がもとになっています。

洋子先生の正確な記憶も、大いに証拠となりました。

また、鶴田先生の声そのものも、「実証的な」証拠となりました。

丸山徳子先生によって、102歳まで黙して語られなかった内容が、なぜ、このような形で日の目を見ることができたのでしょうか？

それは、丸山徳子先生、丸山洋子先生、鶴田昭則先生、ひいては、三浦環先生、サルコリ先生の愛が基盤になっていることは間違いありません。

筆者は、今後とも、こういった意味で、研究を進めていきたいと思っております。

ご協力に深い感謝の意を表します。

ありがとうございました。

注

- 1) 浜野政雄『新版音楽学教育概説』（音楽之友社，1967），pp. 87-132.
- 2) 関根豊吉『音楽科教育学概論』（音楽之友社，1985），pp. 114-140.
- 3) 渡辺陸雄 浅香淳編集『小学校音楽教育講座第 6 巻音楽科基礎指導法 | 歌唱 |』（音楽之友社，1982），pp. 40-55.
- 4) 小田野正之 浅香淳編集『小学校音楽教育講座 第 9 巻音楽基礎技法』（音楽之友社，1983），pp. 119-152.
- 5) 原田博之「西洋音楽の発声によるうた—日本語の特性を活かした歌唱に向けて」『音楽教育実践ジャーナル』vol. 8 no. 1（通巻 15 号），2010，pp. 24 - 30.）の研究など。
- 6) 米山文明『一日 5 分のトレーニングで声と歌にもっと自信がつく本』（三笠書房，2002），p. 34.
- 7) 『小学生の音楽授業 2』（ビクターエンタテインメント株式会社，VIVG-50040，1988）
- 8) 山口(藤田)文子「発声に関する研究：—音楽科教育の立場から発声教育の必要性に鑑みて—」『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』（茨城大学教育学部）第 57 号，2008，pp. 67-72.
- 9) 鶴田昭則、内野健太、藤田香織、山口(藤田)文子「音楽科教育における歌唱指導の研究—幼稚園、小・中学校、高等学校に共通する内容を中心に—」『茨城大学教育学部紀要（教育総合）増刊号（茨城大学教育学部）』，2014，pp. 67-84. など。
- 10) 茨城大学教育学部音楽科卒業。公立中学校・茨城大学教育学部附属中の音楽担当教諭、茨城県教育庁指導主事、小学校長などを務めた。イタリアの歌、日本の歌・童謡を研究し、ベートー

ベン第九のテノールソロを担当。小・中学校の校歌作曲も多数。前茨城大学非常勤講師。茨城県育研究会音楽教育研究部長、茨城県吹奏楽連盟県南地区会長、つくばで第九実行委員長、ムジカ・ひびき代表、日本の歌・童謡をうたう会代表、音楽教育推進協議会常任理事、茨城大学楽研(音楽専攻)同窓会会長などを歴任。著書・論文も多数。なお、本論文では、鶴田は、鶴田昭則以外には存在しないので、鶴田とは、鶴田昭則を示すこととする。

- 11) Adolfo Sarcoli 1872 シエナ～ 1936. 3. 12 東京 イタリアのテノール歌手。イタリア各地でオペラに出演し、名ソプラノのテトラツィニーの相手役もしたが、来日。イタリア・オペラの名曲と、ベル・カント唱法を日本に伝え、声楽界に貢献した(下中弘編集『音楽大事典第2巻』[平凡社, 1982]p. 981. 参照)。演奏としては、マスカーニ作曲「カヴァレリア・ルスティカーナ」の三浦環、サルコリの二重唱におけるA. サルコリの演奏がある(『伝説のプリマ・三浦環デビュー盤から最後の演奏まで』(VINTAGE, SYC-1001)。なお、筆者はこのCDのA. サルコリの演奏と鶴田の演奏が発声法・表現法共にとてもよく似ていたために非常に驚いた『テノール鶴田昭則イタリア古典歌曲&トスティを歌う(ソプラノ丸山徳子メモリアルコンサート)』(珈琲倶楽部 なかやま, 2014)。なお、A. サルコリの人物紹介については、本論文注9の前掲論文 pp. 70, 71. に、鶴田によって、三浦環の師、丸山徳子の養父、師として詳しい説明が示されている。参照されたい。なお、本論文に登場するサルコリは、アドルフォ サルコリ以外の人物は存在しないので、サルコリは、鶴田同様、A. サルコリ、すなわちアドルフォ サルコリを示すこととする。
- 12) みうら たまき 1884(明治17) 2. 22 東京～ 1946. 5. 26 同地 ソプラノ歌手。旧姓柴田。1900年東京音楽学校入学、本科声楽科、のちに研究科に進んだ。ユンケルに師事。03年邦人歌手のみによるオペラ公演出演後、東京音楽学校助教授となる。10年帝国劇場歌劇部教師として招かれる。11年〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉部分上演にサルコリとともに出演。13年医師三浦太郎と結婚し、14年夫と共にドイツ留学。第1次世界大戦のため、ロンドンにのがれ、アルバート・ホールのデビューに成功。翌15年ロンドンで〈蝶々夫人〉に出演、その成功が契機となって渡米。プッチーニの知遇を得る。22年(大正11)帰国。全国巡演ののち、渡欧。35年イタリアのパレルモで〈蝶々夫人〉出演2000回の記録をつくり帰国。36年歌舞伎座で〈蝶々夫人〉出演2001回記念公演。翌年の大阪公演より彼女自身の邦訳歌詞を用いた。彼女の声は清澄で美しく、派手な演技と相まって好評を得た。日本最初の国際的なプリマ・ドンナ。門下には原信子、関谷敏子らがいる。著書に〈世紀のオペラ〉(1912、大正1)、訳書にベラスコの〈歌劇お蝶夫人〉(1937、昭和12)がある(下中弘編集『音楽大事典第5巻』[平凡社, 1983]p. 2437. 参照)。
- 13) まるやま とくこ 1911～2014 ソプラノ 現茨城県小美玉市宮田に生まれる。鶴田の師。幼少時、先生の父が新聞社に勤めていた関係で家族共々東京で生活する。1911年(明治44年)にイタリアを代表するテノール、サルコリー氏が横浜に渡ってくる。その頃、丸山先生の叔母がイタリア大使館で仕事をしていた。叔母は、その後、東京に住むようになったサルコリー氏のお手伝いさんになる。先生が12歳の時(大正12年)に東京大震災が起こり先生の家が焼失する。そのため、先生は東京のサルコリー氏の家に叔母とともに住むようになり女学校に通う。サルコリー氏には何かと気に入られ、後々、先生は氏の養女になる。氏のもとには、ソプラノ三浦環をはじめ多くの歌手がレッスンを受けに来ていた。そのような音楽的環境にあふれる中で、自然に本格的に氏の指導を受けるようになったのである。又、ある時は、東洋音楽学校(現 東京

- 音楽大学)にも通う。時には、小さなコンサートには出演していた。25歳頃まではサルコリー氏にレッスンを受けていたが、1936年サルコリー氏が没する。しばらくして、欧米で活躍していた三浦環が帰国し、オペラ蝶々夫人に蝶々さんが三浦環、スズキが丸山先生と言う共演も実現した。その後、先生は、結婚を機に、上海に渡ったが、そこでの音楽的環境は、太平洋戦争の影響もあり恵まれたものではなかった。戦後、家族共々、生まれ故郷の宮田に戻り、現小美玉市栗又四ヶに住むようになる。戦後のきびしい音楽的事情と家庭的な事情もあり、オペラ活動は、全くしなかった。後半は、声楽(バルカント唱法による指導)やピアノの指導者として活動する。先生は、つい最近まで存命であったが、2014年1月末日102歳の生涯を閉じられた(本論文注9)の前掲論文 p.70.に、鶴田によって、詳しい説明が示されている。参照されたい[筆者付記]。)
- 14) 〈特集・シンポジウム〉「戦後70年と音楽教育史」のなかで、筆者は2015年(平成27年5月)の音楽教育史学会第28回研究大会でシンポジストとして発表した。
- 15) 本論文注14)のシンポジウムの発言をそのまま掲載、さらに内容を精選し、編集委員会の審査の下、筆者は「歴史認識と歴史研究」の視点からの提言を行い、同様の内容も主張した(「音楽教育史学会第28回研究大会 シンポジウム記録」《特集》シンポジウム『戦後70年と音楽教育史』『音楽教育史研究』[音楽教育史学会]第18号, 2016, pp. 25 - 59.)。
- 16) Ferruccio Tagliavini 1913.8.14 パルコ～1995.1.28 同地 イタリアのテノール歌手。パルマ音楽院に学び、1938年フィレンツェのコンクールで優勝。イタリアはじめ、メトロポリタン歌劇場(1948～)、コヴェント・ガーデン王立歌劇場(1950～)など世界各地で活躍。甘美な発声と唱法によって、リリック・テノールの中でも特異な存在であった。〈愛の妙薬〉のネモリーノ、〈夢遊病の女〉のエルヴィーノ、〈ルチア〉のエドガルドなどを得意とした。41年ソプラノ歌手タッシナーリと結婚。70年引退(黒田恭一 下中弘編集『音楽大事典第3巻』[平凡社, 1982]p.1440. 参照)。タリアビーニ(タリアヴィーニのこと[筆者付記])の演奏についても、鶴田昭則の論考に、丸山徳子先生から、『タリアビーニの声を真似なさい』とよく言っていた」と書かれているが(本論文注9)の前掲論文 pp69, 70.)、鶴田の演奏の息の使い方にタリアヴィーニと近似する要素あり、この点についても、筆者は驚きを隠せなかった(タリャヴィーニ「星は光りぬ～「トスカより」[ブッチーニ]ほか。THE HEARTFUL SINGERS ザ・ハートフル・シンガーズ 世紀を超えてよみがえる歌声 Tenor & Castrato 11 テノール & カストラート)(BUNKENSHA ONGEN -MUSIC, Disc11 THS - 0011)。
- 17) カルーズーとも言う。Enrico Caruso 1873.2.27 ナポリ～1921.8.2 同地 イタリアのテノール歌手。教会の聖歌隊で歌ったのち、歌を学ぶ。1894年生地のテアトロ・ヌオーヴォでデビュー。1900～01年スカラ座、02年コヴェント・ガーデン王立歌劇場で歌い、絶大な人気を得た。03～20年はメトロポリタン歌劇場を中心に活躍。その声は、たぐいまれな美しさを持ち、しかも力強く、抒情的な歌も、劇的な歌も等しく十全に歌いえて、今なおイタリア・オペラを歌うテノールの理想とされている(黒田恭一 下中弘編集『音楽大事典第2巻』[平凡社, 1982]p.628. 参照)。
- 18) 『人間の記録・・・㉔ 三浦環 「お蝶夫人」』(株式会社日本図書センター, 1997)p.115.
- 19) 〈音楽教育史学会第28回研究大会 シンポジウム記録〉《特集》シンポジウム『戦後70年と音楽教育史』『音楽教育史研究』[音楽教育史学会]第18号, 2016, pp. 57 - 59.
- 20) 同上書、p.58.